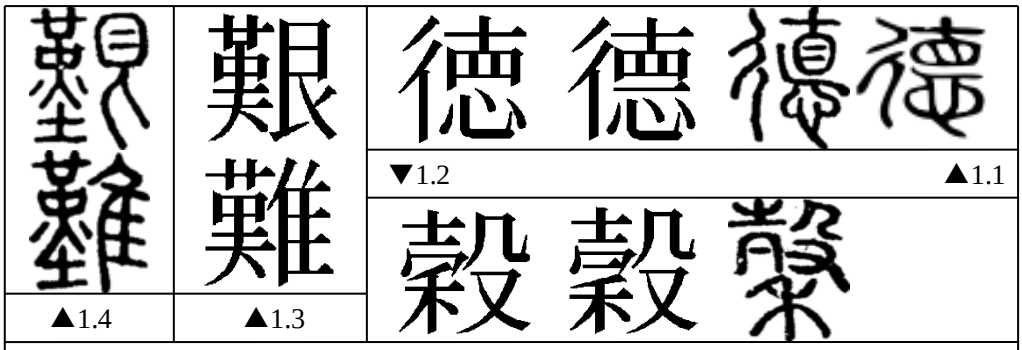
我々が日常的に用いている漢字だが、漢字ひとつひとつが何を示しているかを意識することはほとんどない。今日では漢字はもはや形状で識別される符号であり、純粋な象形文字としては扱われていないが、その形成には当然古代中国人の価値観・世界観が大きく関与している。古代中国人の価値観を知らないことで漢字の使用に支障が出ることはあまりないが、漢字が存在している以上そこに何らかの秩序があることは明白であり、それを探求したいと自然に欲される。頻繁に使う漢字でも改めて眺めてみると意外な隠れた性質があることに気づく。漢字の形成と運用の歴史を知ることで、より漢字が鮮明に見えてきて、どのように用いるのがよいかもわかってくる。いくつもの漢字に潜在する関係を知覚した時、きっと多くの人が「点が線へと繋がる」感動を覚えるだろう。

ここでは数多ある漢字のごく一部について簡単な説明を試みた。金文や甲骨文字の資料は稀少のため、字源として参照する字形は大部分を篆書に頼った。前半では主に現代に於ける漢字運用と歴史上の漢字運用の比較、後半では主に字源による漢字の関連附けを主題としている。この分野は研究自体も現在進行的要素を孕んでいるから、誤った記述を含んでいる可能性もある。内容の誤謬の責任は全て●●にあるが、怪しいものは申し訳ないけれども目をつぶっていただきたい。

なお本文で用いる「字種」とは「意味上区別される漢字の単位」であり、「字体」「字形」とは「形状で区別される漢字の単位」である。また、三角括弧でくくられた漢字は字種を指す。例えば同字種異字形の関係にある〈島〉と〈嶋〉は同じ意味である。文脈上特定の字形の明示が必要な場合は同字種でも字形を統一していない。



▼1.2　▲1.1

▲1.4　▲1.3

本字体と略字体の「誤差」

本字体と略字体の間にごくわずかな形状の変化がみられることがある。1.1および1.2に示すように、〈徳〉と〈穀〉は一画ずつ減っている。こういう類の多くは明治初頭や戦後に略字体として制定されたものである（それまでの時代でも、筆記でこう書かれることはあっただろうが）。

しかし、これは漢字廃止の一段階として行われたものだから、徹底していない。漢字全体一律に適用するのではなく、部分的にわずかな改変を施したために不都合が生じている。1.3に示すように、現在一般に普及している〈艱〉と〈難〉の偏にはわずかに違いがあるが、1.4を見てわかるように、字源は同一である。よくある例は〈犬〉が〈大〉になるもので、例えば〈突〉〈戻〉〈器〉に含まれる〈大〉は本来〈犬〉であった。点画の削除はかなり多くの文字で行われたことがわかる。

そして、実はデータ上で古典文学などを扱ううえで非常に厄介なのはこれらの文字だ。漢字の符号化について、JISでは「本字体と略字体の画数差が少ない場合、原則として同一コードに包摂する」という取り決めがあり、一方（つまり一般に広く知られている略字体）が簡単に出力できるかわりに他方（あまり実用目的で使われない本字体）の出力は困難になっているのだ。本末転倒としか言いようがない。ひどい場合はユニコードでも区別できず、異体字セレクター（単独ではどの異体字か識別できない字の後ろに数バイト補って異体字を区別できるようにする方法）に頼らなくてはならない。

なお1.5および1.6の〈免〉と〈兎〉も〈大〉と〈犬〉のように混同されやすく、1.7に示すように〈逸〉（イツ）は〈兎〉（ト）、〈勉〉（ベン）は〈免〉（メン）を起源とする。〈兎〉は〈兎〉という字形の方が近年に於いては一般的である。

その他の例を1.8に示す。〈抜〉の旁は〈犬〉に線がつけられているもので、これが行書などで速く書かれて第2画と第3画が繋がり、点が省略されて偶然〈友〉に似たのである。〈抜〉（バツ）の音も〈友〉（ユウ）とは全然関係がない。「祓魔師」（エクソシスト）の〈祓〉などは常用漢字外であったために旁は本来の字形のままで、〈友〉とは区別されている。

壓	圧
價	価
號	号
應	応
▲2.1	

灋	法
灑	汰
▲2.2	

面倒な部分の消滅

画数を減らす最も手っ取り早い方法は、言うまでもなく面倒な部分を省略することだ。2.1の上段（本字体）と下段（略字体）のように、いくつかの字はこういう方針で大きく字形が変更された。2.2に示す〈法〉など一部はかなり古くからある（同様に「和同開珎」の〈同〉は〈銅〉の金偏を削除したものである。当時の鋳造技術では〈銅〉をかたどることに限界があったためだろう。因みに〈珎〉は〈寶〉の略字体か〈珍〉の俗字かで説がわかれており、決定打となる手掛かりは未だ得られていない）。

一方〈圧〉〈価〉〈号〉は明治維新の頃に標準字体とされた略記である。一部分が消滅すると字の組み立てが大きく変わってしまうため、本字体を見た後に略字体を見るとかなり物足りない感じがする。こういう略し方は簡体中文では頻繁に見られるが、略字体からは消滅した部分の担う意味がまるで読み取れない。〈價〉に含まれる〈貝〉の部分が「かね」の意味を担っているのに、〈価〉ではその肝腎要の〈貝〉がない。「アンパン」という名前で中身の餡が入っていないくらい変なのだ。手書きは速く書けて不自由なく伝えられることが目的だから略字体でも問題ないのだが、活字までもそれで出力されるのはいかがなものか。

藝芸 上藝術 下芸閣	缺欠 上缺點 下欠伸	餘余 上剩餘 下準徐（ズニレ）
▲3.1	▲3.2	▲3.3

字形の衝突

面倒な箇所を書かなくなると、別の字と同じ形になってしまうことがある。もっとも有名なのは3.1の〈芸〉で、現在「芸術」（ゲイジュツ）などで一般に用いられる〈芸〉（ゲイ）の字は〈藝〉の略字体。書物のタイトルで「文藝」「藝術」の表記が多いのも、これに起因すると思われる。本来の〈芸〉は「薬草」を意味し、「虫食いを防ぐ栞」の意で「芸閣」（ウンカク）などの語で用いられ、音読みも〈藝〉とは違っていて全く関係がない。つまり、全く関係のない字を同字形に揃えてしまったということであり、日常生活には全くといっていいほど影響しないが、元来の漢字体系を著しく揺るがす改悪だ。古典について記述する際に〈芸〉（ウン）の字も〈藝〉（ゲイ）の字も同じく書かなくてはならないのであれば、混同を招きかねない。学術に無縁な実用目的ばかりを見据えて文化を捉えていてはろくなことがないのである。

同様に、3.2に示す「欠点」「欠席」の〈欠〉（ケツ）が〈缺〉の略字体であるのに対し、「あくび」を意味する「欠伸」（ケンシン）の〈欠〉（ケン）はもともとこの形。〈缺〉を〈欠〉とするのはかなり古くからの誤用だという。〈缺〉は大して画数も多くないのに、なぜ〈欠〉というまるで形の違う字を用いたのだろうか。こういう例は結構多くあり、残念だ。

3.3はほとんど認識されていないが、現代で用いられる〈余〉の本字体は〈餘〉である。略字体というよりは代用に近い。〈余〉の本来の意味は〈徐〉と同系統と記す資料が多く、自分の調べた範囲ではどうも不明瞭。なお「余」を一人称代名詞として用いるのは当て字。

豫予
上豫定
下賜予
▲3.4

臺台
上臺灣
下天台宗
▲3.5

醫医
上醫師
與醫同（ジ）
下收矢（ムルヲレ）
意
▲3.6

▼3.7

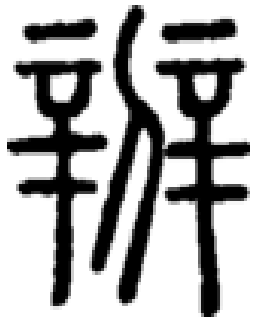
3.4もあまり知られていないが、現代語の〈予〉の多くは本来〈豫〉である。〈予〉はもともと〈与〉に近い意味である。

3.5は「台湾」の繁体中文表記が「臺灣」となることで有名だ。ところが「天台宗」はもともとこの字形。固有名詞ばかりではわかりにくいが、現代語の「灯台」は「燈臺」であり、〈臺〉に比べて〈台〉の字は普遍的に使用するものではなかった。

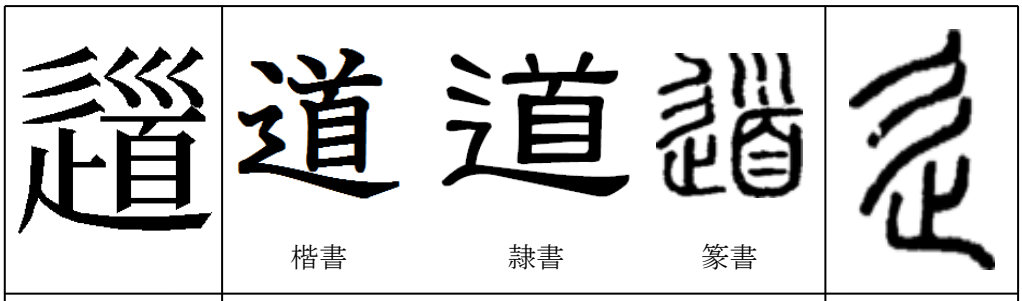
3.6の〈医〉は象形的に「矢が筒にしまいこんであるさま」を表すが、明治の字体整理で〈醫〉の略字体に選ばれ、ダブルブッキングとなってしまった。つまり「医学」と書くと「矢をしまいこむ動作を鍛錬する学問」のようで、実にシュールな光景を彷彿とさせる。〈毉〉が異体字にあるのは、もともと古来中国では医者と巫女（＝シャーマン）が同一であったからで、〈毉〉の部分が「医者」の「矢をしまいこむ」という動作を表している。

3.7に示す〈弁〉に至っては4～6字が統一されたもので、〈弁〉を含む熟語が互いにまるで違う意味だったりするのはこのためである。これを「いちいち全て区別する必要がなくなってよい」と評するのが極めて表面的な意見であることは言うまでもない。

弁瓣辯辨
上冠弁
下花瓣
上辯護士
下辨當



▲〈辨〉の篆書体。しばらく見ていると顔に見えてくる。



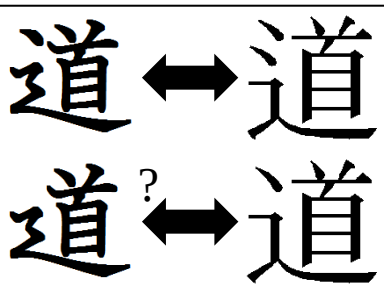
▲4.1　▲4.2　▲4.3

しんにょうの点は一つか二つか

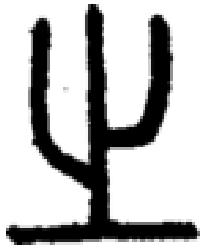
之繞（シンニョウ）の点は1つか2つか、字によって違っている。二〇一〇年以前から常用漢字であったものは点が1つ、表外漢字と二〇一〇年に新たに常用漢字に追加された〈遜〉〈遡〉〈謎〉は点が2つとなっている。どうしてこうなったのかというと、「楷書では1点なのに活字が2点なのはおかしい。1点に揃えよう」という考え方で、一九四九年の当用漢字字体表で常用漢字だけ整理されてしまったからである。つまり、もともとは何ら区別のないものだ。

字の起源を辿れば、之繞は行人偏（ギョウニンベン）と〈止〉を縦に並べた〈辵〉（チャク）（4.1に篆書を示す）という字が変形してできたものだ。4.2のように隷書の段階で崩れ、2点之繞になった。ということは、崩れた字形として2点になったのだから、点の数はどちらが正しいかを定めることはあまり本質的ではないことがわかる。明朝体の之繞は隷書に従っていると思われるから同様である。字源に忠実にするなら、〈道〉は4.3のようになる。

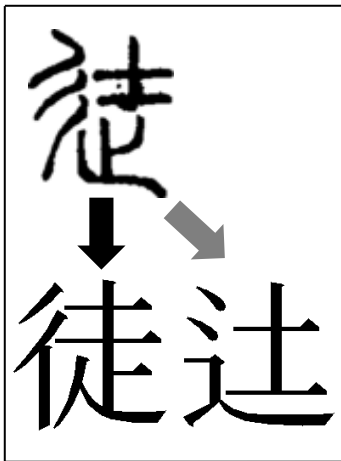
ここからは私の類推であって根拠は得られていないが、隷書から（草書や行書を通じて）楷書へと変遷するにあたり、之繞の点2つのうち上のものはそのまま残ったが、下のものは次の画と繋がったのではないかと思う。つまり2点之繞の点の一方が消失して楷書の1点之繞になったのではなくて、下の点が次の画と繋がってその存在が判りづらくなってしまったのではないか。その証拠（になりうる事実）として、楷書の之繞の2画目は、一般的な隷書や明朝体とは違って3のように弯曲している。

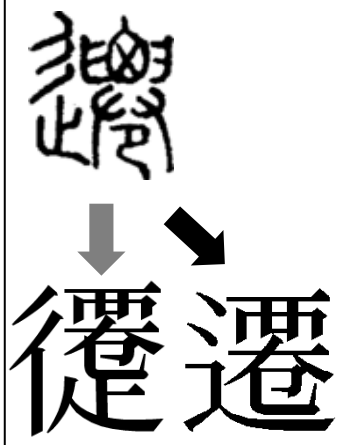


▲4.4



▲4.5





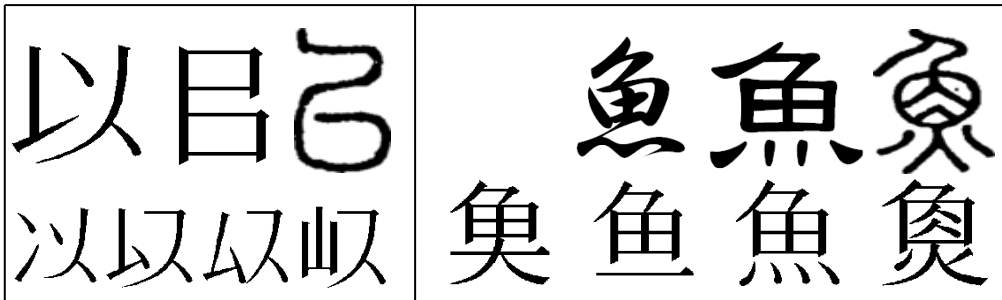
▲4.6

もしこれが正しいなら、4.4のように、明朝体の2点之繞は楷書体の1点之繞に、そして明朝体の1点之繞は楷書体の「0点之繞」に対応していることになる。

結論としては、点の数は字源から考えてどちらが正しいと言うことはできないが、慣習に従うのであれば明朝体は2点之繞に、楷書は1点之繞に統一するのが妥当であり、そもそも明朝体の之繞を1点にしても楷書に近づけたことにはならない、また少なくとも1点之繞と2点之繞が混在しているよりは一方に揃える方がよい、ということになる。

ちなみに、「之繞」という名前は〈之〉に似ていることからきたものだが、起源は全く違う。〈之〉の篆書は4.5に示す通りで、これを中央、左、右、下の順に繋げて速く書くと確かに楷書の形になる。

餘談だが、実は〈從〉〈徒〉などにも之繞が含まれている。こちらは篆書から隷書になる際に行人偏と〈止〉が再び分解したのである（4.6に示す）。原因は旁が縦に短く、之繞ではバランスが悪いため。化学でいうマルコフニコフ則のような現象である。



書体差による異体字

異体字が生じる大きな原因のひとつとして、書体による差が字体による差と捉えられてしまうことがある。

5.1のように、〈以〉はもともと全く違う字形をしていたが、隷書以来は篆書から大きく崩れた現在と同じ字体が広く使われている。確かに本字体を速く書くと現在の字体に近い形状になる。下段の字体も存在し、現在でも戸籍上は区別できるらしい（●●は〈以〉という字種を使う苗字を「以西」しか知らない）。ただしこういった区別は本質的でない。

書体差による異体字の好例として、5.2に示すように、〈魚〉には書体ごとの多様な異体字がある。篆書では〈火〉だったものが隷書では横長にするため筆順が変化し、列火（レッカ）となっている。現在の日本式新字および繁體中文では隷書に倣った書体が、簡体中文では〈火〉に相当する部分が〈一〉となった行書に倣った書体が採用されている。日本では〈火〉が〈大〉となった書体が手書き略字体で用いられ、特に魚偏（さかなヘン）ではその傾向が著しい（寿司屋の〈鮨〉の字など）。因みに〈衡〉の字の中央はもともとこの形であり、〈魚〉とは関係がない。

戸 一般的楷書	戸 康熙字典体
▼7.2	▲7.1
腔	腔

便	便
▼7.4	▲7.3
速 はらうか、とめるか。	速

明朝体としてのデザイン差

書体差、字体差以外に「デザイン差」と呼ばれるものがある。明朝体はその性質上書道というよりは装飾文字に近いので、字体の解釈によって部位の表現方法に複数の可能性ができるのである。現代では可読性も重視されるから、どんなデザインがよりスムーズに読めるかも加味され、その結果デザインがフォントごとに違っていたりするというわけである。実はこのデザイン差については常用漢字表の附録で言及され、「こういう差については字体差ではなくデザイン差であるとして許容する」という旨の内容が多くの具体例とともに掲げられている。JISでは字体差の扱いについてはやたら杜撰な傾向があるが、フォント業界が神経質になるデザイン差については結構綿密に記述しており、産業重視の感が否めない（なにしろ、標準字体を決定しているJISはJapanese *Industrial* Standardsである）。

デザイン差が生じる要因のひとつとして、「康熙字典体」というものがある。康熙字典は一七一六年に康熙帝の勅命で編纂された明朝体で字形を示した字典で、江戸時代以降日本では漢字字体の権威のような扱いを受けていた。その康熙字典に示された〈戸〉の字形が7.1の右に示すもの。〈芦〉や〈煽〉はWindows Vista以降の「ＭＳ 明朝」でこの字体が採用されているので、目にしたことはあるだろう。しかし、これは歴史上篆書でしか用いられておらず、復古主義的な考えから強引に字書に取り入れられたものなのである。

〈腔〉は、古くは7.2の右に示すデザインが用いられたが、形状の解釈の違いによって中央に示すデザインがつくられた。フォントによっては左に示すような穴冠（あなかんむり）を全て繋げたデザインもある。

既既既既
既既既
既

次次次
次次次

▲7.6　▲7.5

〈便〉は「筆押さえ」のついた7.3の右に示すデザインが一般的であったが、筆押さえが教育上よくない（筆押さえまで手書きで書いてしまう児童がでてくる）などの非本質的な理由で削除され、中央に示すデザインとなった。この俗に「ヒゲ剃り」とも呼ばれる筆押さえの削除は常用漢字のみに適用され、表外漢字では依然として残っている。7.3の左に示したのは篆書に従った異体字であり、歴史的にも用いられたことはない。

7.4に示すようなはらいととめの違いもかなり多い。他には〈退〉、〈継〉など。

7.5に示す〈次〉もデザイン差が多い。原因のひとつとして、偏が〈二〉か、全体が象形かのどちらかで議論されており、成り立ちが明確にわからないということが挙げられる。書物の活字を見ている限り、中央下と左上が多いように感じる。

デザイン差、字体差ともに著しく多様な例も多く、〈既〉がその一例。篆書は7.7のように結構異なっており、デザイン差についてどれがふさわしいかは一概に言えない。〈亡〉も7.8のように字形が変化してきたもの。7.9、7.10に示す筆押さえは不要に思えるが、これは〈人〉と〈入〉を字源上区別するのに重要で、簡単になくすべきものではない。

▲7.7

7.8　▼7.9

亡亡亡

内内
喻喻

▼7.10

人入

怒涛の簡体字

繁体字は日本の漢字の本字体とおおよそ一致していて比較的見慣れているため、臺灣に旅行に行っても看板がかなり読める（時々平仮名片仮名さえ見かける）。ところが簡体字は本字と字形が大きく異なっていることも珍しくないので、知らないと本当に読めない場合が結構ある。そういう字形の大半は本字体のごく一部が抜粋されてつくられた字形だ。左にその類の簡体字の例を並べてみた。日本人から見ればどうもこういう省略形はしっくりこない。〈務〉は音を表す〈矛〉（ム）が取れてしまっているし、〈麗〉は「鹿の角が綺麗に並んださま」を表す字なのに角だけになっている。

簡体	日式	繁体
阳	陽	陽
复	復	復
录	録	錄
丽	麗	麗
务	務	務
亲	親	親
击	撃	擊

簡体	本字
爱	愛

中国人の〈愛〉には〈心〉がない。以上。別に深い意味はないよ。

簡体	本字
线	綫
运	運
迟	遲
风	風
讲	講
议	議
历	歷
画	畫
趟	趟
讨	討

簡体	本字
机	发

右の字は〈發〉の略字でありながら〈髮〉の略字でもあり、左の字は〈機〉の略字でありながら〈机〉そのものでもある。かなりひどい衝突だ。まあ、日本でも〈弁〉などのひどい例があるけれど。

簡体	日式	繁体
齿	歯	齒
图	図	圖
专	専	專
传	伝	傳
场	場	場
择	択	擇
为	為	爲
单	単	單
丝	糸	絲
济	済	濟
实	実	實
马	馬	馬
长	長	長
门	門	門
书	書	書
卩	昼	晝

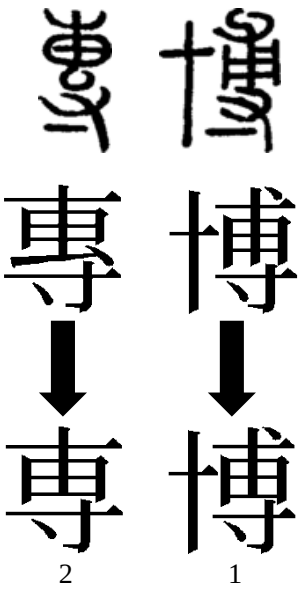
日本式略字も簡体字も共に本字体を書きやすくするために省略されたものだが、その発想はそれぞれ結構違っているようだ。日本式略字は本字体の複雑な部位をより簡易な既存の部首に置き換えているものが多いが、簡体字では完全に草書に従い、新しい形をどんどんつくっている（〈図〉などは例外的に逆）。〈傳〉を見れば明らかだが、日本では旁が既存の〈云〉で代用された。一方、簡体字では「キマ」のように見える、漢字としてはそれまでになかった形が採用されている。安易に別起源の部分を同字形で置き換えない点に関しては日本式新字よりよい（日本式だとこの場合〈伝〉と〈云〉に関係があるように見えてしまう）が、草書を強引に明朝体にするという発想は全くいただけない。

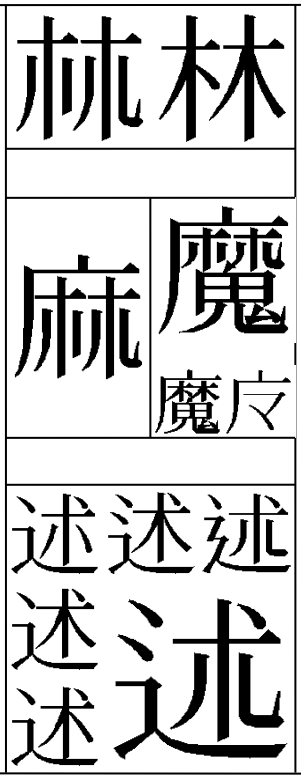
〈単〉〈実〉〈済〉など、簡体字と日本式新字でわずかに違うものも結構ある。こういう違いのわずかな字形は、Unicode などの包括的な文字コードでは区別が困難であり、同じ番地に割り当てられていることも少なくない。日本で Unicode が導入されると話題になったとき、「〈骨〉が左右逆の字形になるかもしれないぞ」と悲観する人が続出したとか（簡体字の〈骨〉は「左右逆」）。

極端な省略により「けったいな字」となっている簡体字と比べても日本式新字の方が悪質な場合が実はある。〈糸〉は象形の都合上〈絲〉でなければいけないのだが、日本では〈糸〉としてしまっている。〈糸〉は本来〈絲〉と別字で、衝突しているのだ。

別字源の同字形

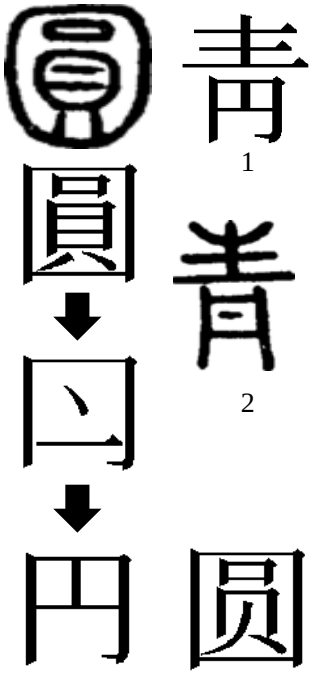
〈專〉と〈博〉は、どちらには点があってどちらには点がないのか迷ったことのある人も多いだろう。この2字は、もともと全く違う字形だったのに中途半端な略字化によって互いにそっくりな形になってしまった例で、1、2を見ても字源が違うのは明らか。上半分は「紡錘（繊維をよるためのおもりと紡いだ糸を巻き取る器具）」を意味し、これが一か所にとどまって揺れ動かないことから「專一」「專念」の意が生じた。また紡いだ糸はまるくまとまるので「まるい」という意も持ち、これが〈転〉（本字体は〈轉〉）や「まるくて平らな敷石」の意である〈磚〉（かわら）へと派生した。〈博〉に含まれる〈甫〉は〈圃〉（「田圃」（たんぼ））など）の原字で、「平らで広い苗床」の意。これに「集める」を意味する〈十〉を加え、「（主に知識教養などを）広くする」という意味になった。こういう点で〈專〉と〈博〉は全くの別物である。

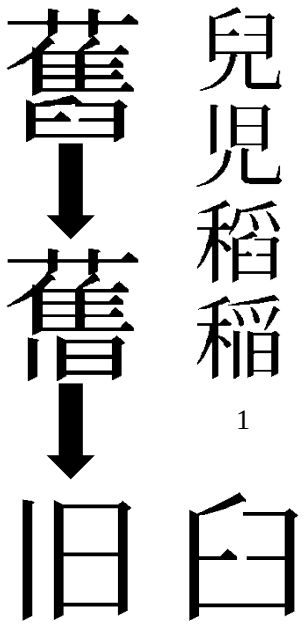




〈麻〉から「マだれ」を除いた部分は〈林〉と全く関係がない。〈魔〉についても同じ。〈述〉から之繞を除いた部分とは関係がある。関係のない部分が似てくるのは、楷書で書きやすい形が追求されると自然に似てくるからで、関係のある部分が別物になっていくことがあるのは大きさや位置関係上の都合だ。

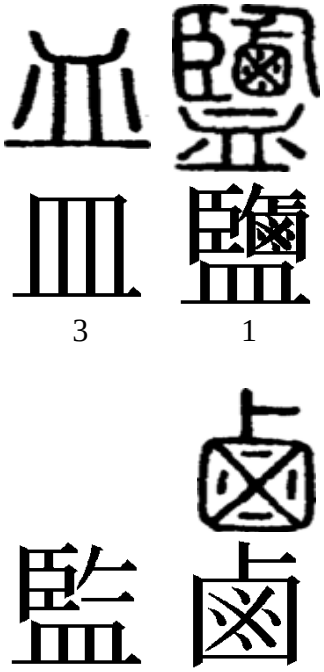
〈青〉は康熙字典で1に示す字形となっているのだが、実はこの字形、歴史上隷書以降では殆ど使われていない。康熙字典中でも〈青〉の字形はまちまちであることから、明朝体がつくられた当時、既に康熙字典体の〈青〉は一般的に用いられる字形ではなくなっていて、康熙字典が編纂される際にわざわざ古い篆書の字形（2）にならって書かれたことがわかる。康熙字典体の〈青〉は〈円〉のような部分を含んでいるが、起源は全く別で、〈円〉は3のような過程で省略された、近代以降の略字。〈員〉の部分が点で代用され、速く書かれて最終画が上に寄った結果、現在の字形となった。簡体字ではあまり略されていない（4に示す）。

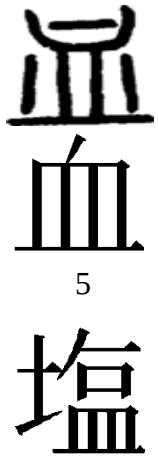




〈臼〉は書きにくいため〈旧〉で置換された略字が多い。1に示すように、〈稲〉〈陥〉〈児〉などがあてはまる。では〈旧〉自体は何なのかというとこれも略字。2のような省略過程を経てできたものだが、よく見ると本字体の〈臼〉に相当する部分が残っただけ。つまり〈旧〉は〈臼〉と同一起源なのである。或る意味では字形衝突であり、過度の省略の悪例だ。

1は〈塩〉の本字体。〈臣〉は「見開いた目」、右上の2画は〈人〉と同一、〈鹵〉（2）は「しお」を、〈皿〉（3）はそのまま「さら」を、その上の〈一〉は「みず」を意味する。全体で「皿に盛られた水の中の塩を見るさま」を示している。甲骨文字では〈人〉の部分が下に大きく伸びていて、覗き込んでいる様子が実に分かりやすい。〈鹵〉がなければ〈監〉である（4に示す）。〈皿〉と〈一〉の組み合わせは「血が皿に盛られたさま」を意味する〈血〉に同じ（5に示す）。ここから〈臣〉が土偏（つちへん）に、〈鹵〉は〈口〉に略されてできたのが現在一般に用いられる字形（6に示す）。途中段階の字形も数多くある（その一部を7に示す）。





現在の字形は略字とはいえかなり古くからあり、日本では平安時代にその記載がある。徒然草第136段に「先づ、『しほ』といふ文字は、いづれの偏にか侍らん」と問はれたりけるに、「土偏に候ふ」と申したりければ、……」とあり、これは「シオという字は何偏が含まれているか」と問われ、〈鹽〉の偏（？）である〈臣〉と答えるべきところを略字しか知らず〈塩〉の偏である土偏と答えたのを見て、教養が浅い人だと馬鹿にしている話だとされている。しかし、これを誤りとして「いづれの偏にか侍らん」は「どの篇（文献）にございますか」という意味で、これに答えられなかったためごまかして「土偏です」と言ったのを面白いと捉えているのだとする説もある。どちらかというと後者の方が納得できそうだ。いずれにしても、当時すでに土偏の略字は存在していたらしい。

「月」という字形で書かれるものの起源は、実はおよそ3種類ある。ひとつは勿論「天体の月」をさす〈月〉で、残りは〈肉〉と〈舟〉だ。〈肉〉の方は小学校でも部首として月偏（つきヘン）と肉月（ニクづき）を区別しているのである程度認識されているが、〈舟〉と同等の〈月〉の存在はあまり知られていない。「天体の月」を起源とするものは1のような変化を経て現在の字形に至っている。〈期〉など、時間に関する漢字に含まれていることが多い。〈肉〉を起源とするものはおおよそ2のような変化を経ている。3に示す〈胃〉〈腸〉など、肉体に関係する漢字に含まれる。このように全く起源が違うのだから、手書きは別としてもやはり活字では字形を区別して表すべきだ。

1

2

3

〈月〉

〈肉〉

4

5

▲〈朝〉の篆書体。天文現象でありながら、旁は〈月〉ではなく〈舟〉が起源。舟のいる海から朝日が昇るさま。

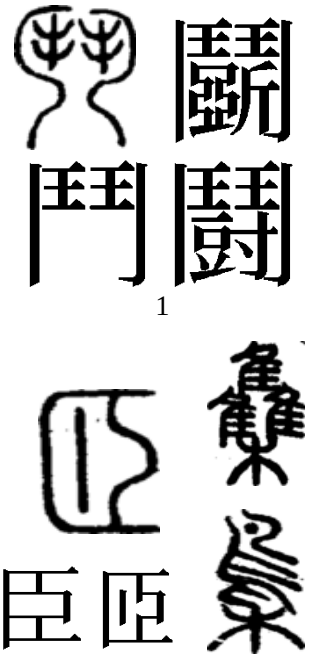
〈月〉と似たものにもうひとつ〈朋〉があるが、これも字源としては全く違う。〈萌〉の字源は草冠（くさかんむり）と〈明〉らしい（4に示す）が、音は「ホウ」。〈朋〉（ホウ）と関連しているように思えるのだが、自分の参照したどの文献もこれについては記述がなかった。

〈明〉の偏は「太陽」の〈日〉だが、実際のところ〈日〉の字体よりも〈囧〉（ケイ）を含む〈朗〉の方が普通だった（5）。〈囧〉は窓を意味し、月明かりが窓に差し込むのを「明るい」としたらしい。どうでもいいが〈日〉の方では太陽と月の位置関係がおかしい（三日月なら太陽は月の右方に見えるはず）。同級生が「これは太陽よりはるかに『明るい』ものが月の右側にあるからで、それ故〈明〉は『明るい』なのだ」と言っていたが、−26.7等級を超える明るさではヒトの目は到底耐えられまい（笑）

門構（モンがまえ）の〈鬪〉はかなり新しい字形。もともとは「たたかう」を意味する部首（1）だったのだが、形が似ているというだけで明治の字体整理の際に門構に変えられてしまった。

〈姫〉の旁は、実は〈臣〉ではない。「顎のふくよかなさま」を意味する2の字種である。

〈集〉は「鳥が木に集まる様子」を描いた字だったが、かなり古くから鳥は1羽である（3）。漢字に於いて同じものを3つ描くことはたくさんあることを代辯するが、1羽では全然「集まって」いないではないか。



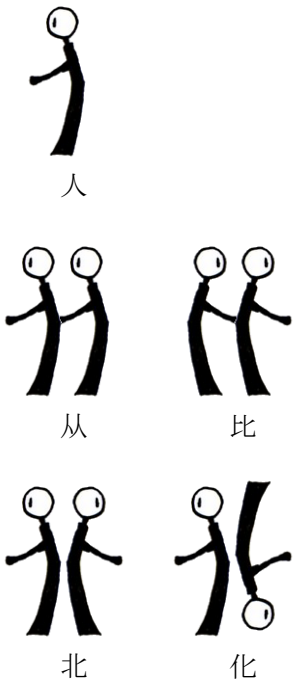
かなり衝撃的な事実だが、〈著〉と〈着〉はもともと〈箸〉だったらしい。竹冠（たけかんむり）と草冠（くさかんむり）が入れ替わるのは、意味が近いうえに形も似ているのでよくあることだが、〈着〉が〈著〉からできたということは言われない限り気づかないくらいに大胆な変化である。「チョ」と「チャク」で読み方まで違っている。実は〈着〉はもともと〈著〉の行書や草書での形で、日常生活で楷書体をめったに使わない農民や町人は〈着〉という字形しか認識していなかっただろう。後に〈著〉と〈着〉は別字と認識され、今日に至っている。現在でも例外的に藝術に関する書物では「着色」を「著色」と書記することがあるらしいが、基本的に〈著〉と〈着〉は全く異なる役割をしている。

〈句〉と〈勾〉も元は同じ字。「口」と「厶」はすぐに置き換えられる傾向があり、〈強〉〈松〉〈統〉などは「厶」が「口」となった異体字がある。〈船〉と〈舩〉も同じ字。「俳勾」「慣用勾」といった書き方はしないし、「句玉」「句配」といった書き方もしないが、本来はどれも正しくあるはずのものだ。慣用によって同一起源の字が「役割分担」してしまう好例である。

甲骨文字の擬似的再現

最初は明朝体とその字源について説明するだけのつもりだったのに、調べているうちに甲骨文字にも興味が湧いてしまってここに至る。所謂受験生（笑）である。容易に理解できてかつ十分に信頼のできる甲骨文字の図形資料はほとんどないと言っても過言ではないので、資料の内容から甲骨文字を現代的な象形感覚で再現することを試みた。絵はどれも●●が描いたもので稚拙だが、多少なりとも理解の助けになればと思う。

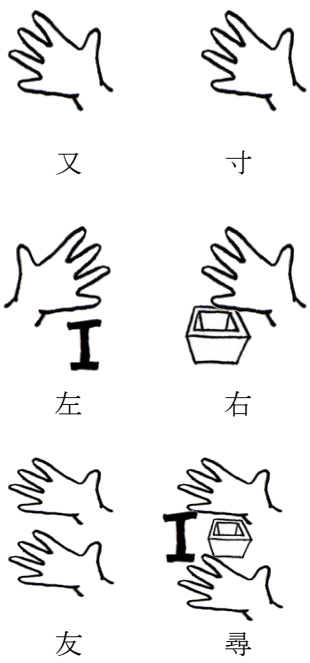
下段右に〈人〉からできている漢字を並べた。漢字が表語文字としての性質を長らく保持し続け、今後も失われる気配がない要因は、ひとえに〈人〉など字を構成する基本的な部分が簡素で書きやすい形であることだろう。例えばヒエログリフには多くの表語文字があったが、その形状が複雑であったため表音文字が主軸となっていき、表語文字は廃れていった。ヒエログリフの表語文字は輪廓を基準として物事を表したのに対し、漢字では線を基準として物事を表したため筆記能率がよく、後世に長く残ることとなったのである。



〈人〉ふたりが左を向いて並ぶと後ろの人が前の人に従うということで〈从〉（ジュウ）となった。これは〈從〉（〈從〉の本字体）の元となる字である。一方〈人〉ふたりが右を向いて並ぶと、これは比べあっている様子を示す〈比〉となる。なぜふたりの向く向きの左右で違いが出るのかということに言及している文献はなかなか見あたらないので説明できないが、おそらく向きには意味はない。

背中同士を向けているものは〈北〉。王は南を向いて座るので、王が背中を向ける方角を〈北〉で表すようになった。「敗北」に〈北〉が含まれるのは相手に背を向けて逃げることに由来する。〈北〉が専ら「北」の意味で使われるようになると、「背中」の意は〈北〉に肉月を添えた〈背〉で表すようになった。

〈人〉ふたりが点対称に背中を合わせて並んだものが〈化〉。現在の字体では〈北〉も〈化〉も旁は匕首（あいくち）となっていて同じだが、戦前までは字源の違いから筆記でも別物として扱われ、両者は厳密に書き分けられていた。〈北〉〈比〉〈能〉では1画目を左から右に引き、2画目の最後ははねない。それに対して〈化〉〈貨〉〈靴〉〈花〉の旁はもともと匕首で、1画目は右から左にはらい、2画目も最後をはねる。

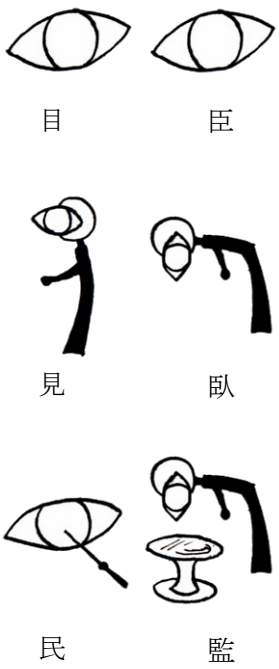


上段左に手に関係する字を並べた。〈手〉ではないが、〈又〉が多くの字に於いて手の役割を果たしている。〈右〉は「右手」と「神への祝詞を入れる器」からなっている。「口」という字形は〈口〉（くち）ではなく、「神への祝詞を入れる器」を意味する〈⊲〉（サイ）なのだ（for all 記号⊲を用いたのは便宜上の代用）。「口」という字形が〈口〉ではなく〈⊲〉であるという説を立ててあらゆる漢字を体系化することに成功したことは、文字学で有名な白川静氏の最大の業績のひとつといわれている。

一方〈左〉は「左手」と「呪具（呪術に用いる道具）」からなっている。「左手」は単純に「右手」を左右反転したもので、この差が楷書体の〈左〉と〈右〉の筆順に違いがあることの原因である。〈左〉は縦画が長く、〈右〉は横画が長い。

〈左〉と〈右〉を合わせた字がなんと〈尋〉。右手に器を、左手に呪具を持って「神を祀る場所をたずねる」意らしい（ただし現代語ではこの意味の「たずねる」には〈訪〉の字をあてる）。〈寸〉は〈又〉とほぼ同じ。

この他、手と手を重ねた様子から「仲が良い人」を意味する〈友〉ができた。

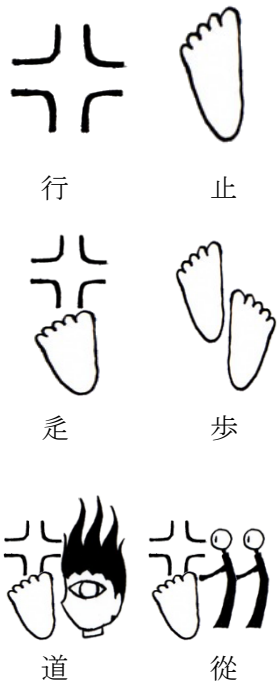


右に〈目〉に関する字を並べた。〈臣〉は元を辿れば〈目〉とほぼ同じ形。時間の都合上同じ絵を使い回してしまったが、瞳が下まぶたを超えて大きくなったものが〈臣〉。〈人〉の頭に〈目〉をくっつけたのが〈見〉。漢字は特徴的な部分だけを抜粋して示すようにできているので、見るという行為に於いて重要な目を除き、人の頭は省略されているのである。実は「ともだち」に似てる？（©浦沢直樹）〈人〉は字の中で下方に来ると人足（ひとあし）という部首になる。個人的な話だが、小学生の時に「〈見〉の部首は？」と訊かれて「ふたあし!!」と答えてしまったのを猛烈に覚えている。人足を「一足」と誤解していた上に脚2本の象形だと思ったからそう答えたのだろう。

〈臥〉も本質的には〈見〉と同じような字だが、屈んだ姿勢のため「下を見る」意となった。これに〈血〉（というか〈皿〉と「水」）が加わると前出の〈監〉となる。〈民〉はなかなか衝撃的な字で、瞳を針で突き刺した様子から「視力を失った（神への）奉仕者」を意味する。「視力を失わせて逃げられなくした奴隷」を意味すると聞いたこともあるが、確実ではない。後にこの字が「神に仕える者」から転じて「ひと」、「たみ」の意味になったことは容易に推し量れる。最初に〈民〉の成り立ちを聞いたとき、自分は「目が見えないくらいに物わかりの悪い人々」という意味の字かと思ったが、やはり漢字は呪術や信仰に関する意味が原義であることが多いようだ。この〈民〉という字に関連して「『子供』の〈供〉は『奴隷』の意を含む字だからよくない、『子ども』と書くべきだ、と主張する人がいるが、『国民』の〈民〉だって「奉仕者」の意味なのだから、こんな主張がまかり通っては使える文字などごく少数だ」という意見を同級生から聞いた。なるほどなあ、と感心した。そもそも「こども」は和語だから漢字をあてる必要も元来なく、「子供」と書くことさえ本質的ではないのだが。

〈衣〉はとてもわかりやすい象形文字だ。襟元を合わせた形が見事なまでに簡潔な線で示されている。鍋蓋（なべぶた）のような上の部分は背中側の布か。

意外にも、この〈衣〉からできた字のひとつが〈卒〉である。人が亡くなった時にはすぐ襟を重ねて留めるので、〈衣〉に結び目の〈丿〉を書き足して〈卒〉となった。「すぐに」または「亡くなる」からそれぞれ「にわかに」「ついに」の意となった（漢文訓読でもこの2通りをよく見る）。〈衣〉と〈卒〉はそれぞれ右上のような変化を経て現在の字形に至っている。



〈止〉はもともと足の形を象ったもの。〈行〉は十字路の象形文字。〈行〉の左半分（つまり行人偏）と〈止〉を組み合わせたのが「しんにょうの点は一つか二つか」で既出の〈辵〉（チャク）で、「道を歩いていく」意。これは之繞の元となった字で、種々の字と組み合わせられて多様な字を形成する。異族の人の生首を持って道を歩くと呪われないという信仰から〈首〉につくと〈道〉、前述の〈从〉につくと〈從〉（之繞にならず再分解される例）となる。之繞を含む字はどれも「道を歩く」という要素を持っているのである。

〈臥〉は〈臣〉と〈又〉からできており、瞳を手で傷つけて視力を失い、神に仕える者となることを示しているという。発想は〈民〉とよく似ている。「臣民」という言葉もあるくらいだ。視力を失うことで他の感覚器官が敏感になるように思えるから、こういう発想が生じたのだろうか。

〈取〉は〈耳〉と〈又〉からできており、予想を裏切らず「耳を手で取っているさま」である。戦争が起こると兵士は戦場で敵兵とまみえたが、その際殺害人数が貢献度の指標であったので、敵兵を殺害したときにはその証拠として左耳を回収したそうだ。日本でも耳塚は有名だろう。そして「最も多くの左耳を取った者」が〈最〉で、袋に多くの左耳を入れている様子。

そんなわけで〈最〉の〈日〉のような部分は〈日〉ではなく「袋」を意味する部分である。〈冒〉もこれに同じ。

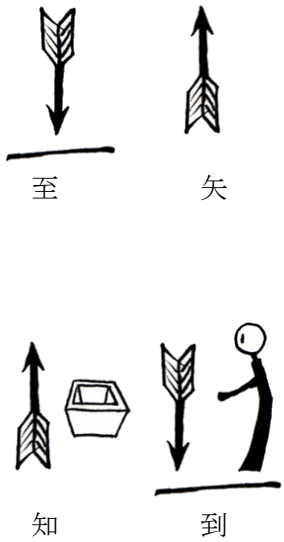
〈然〉は〈肉〉、〈犬〉、〈火〉からなっている。天の神は犬の肉の焼ける香りを好むとされたので、犬は貴い生贄として用意されていたようだ。最初の「本字体と新字体の誤差」で紹介した〈拔〉（〈抜〉の本字体）や〈祓〉も〈犬〉に刃物の線を加えたもの。清めるとか邪気をはらうとかいった場合、生贄に頼るというのが古代中国人の自然な発想だったことがうかがえる。その後〈然〉は「しかり」「しかれども」などの意味に変遷していったので、原義は火偏（ひへん）を加えて〈燃〉という字で表されることとなった。そんなわけで〈燃〉には奇妙なことに火偏と列火（れっか）で〈火〉がわざわざ2つ含まれているのである。だいたい漢字が増えるのはこういうのが原因だ。先ほどの〈民〉も次第に「たみ」の意味に変わっていったため原義は〈眠〉に譲られ、これが「目が見えない」から「ねむっている」という意味に変化した。

〈縣〉（〈県〉の本字体）はなんと木の枝に生首を逆さ吊りしている字。「都道府縣」には生首が2つ出てくる。〈眞〉は匕首と〈首〉からできていて、行き倒れの死者を指す。

〈衛〉は複雑ながらわかりやすい字だ。中央の四角形は〈口〉でも〈𠙵〉でもなく、城郭を表す。上下の〈五〉や〈丰〉に似た形は、実はもともと〈止〉と同じ形を横に倒したもの。「防衛目的で城郭周辺の道を巡回する様子」を描いた字なのである。古い形では足が上下左右に4つあるものも確認されていて、この説をよく支持する証拠となっている。その字が現在まで残っていれば、〈韋〉の左に〈止〉が、右に〈夂〉がつく字だったことだろう。〈夂〉は〈止〉がひっくりかえった形で、これと〈𠙵〉が合わさると〈各〉となる。白川静氏が〈𠙵〉の説を提唱するまでの文献には〈各〉（カク）の音は〈口〉（コウ）からきているとする説があったらしいが、矛盾が多かったとか。

〈正〉は城郭を表す四角形と〈止〉からできている。「敵の城郭の前に進軍して相手を正すために戦う」という意味からできたらしいので、なかなかわかりやすい。だいたい人は自分と意見の合わない相手を間違っているとして自分の考えを正しいと無批判に思い込んでしまう傾向がある。この字にもよく表れている気がする。

〈兄〉は〈人〉と〈儿〉からできており、「神への祝詞を入れる器を持った人」の意。現代の「兄」とはかなり意味が違うが、〈祝〉という字ではなかなかしっくりくるように思う（示偏（しめすへん）は台座を意味する）。〈光〉になぜ人足（ひとあし）が含まれているのかというと、「火（松明）を持っている人」の象形だからである。実際の〈光〉の金文や甲骨文字はもはや「頭が燃えている人」にしか見えないが、〈見〉が「頭が目になっている人」の図であることと同様で、漢字では強調したい部分以外は省略されるからそうなっているのである。〈先〉も同じで、「先行している」という意味を強調するために頭に足をつけている。現代人の感覚からすれば「強調するにしても、足の大きい人を描けばよかったのでは」と思われるが、そういう発想ではなかったようだ。



〈矢〉は意外に多くの字の基礎を作っている。〈矢〉を放ち、それが地面に刺さると〈至〉。それが人の前で起こると〈到〉。とてもわかりやすい。〈到〉の旁は字源からして〈人〉なのだが、〈人〉と〈刀〉はよく似ていたためかなり古くから間違われていたらしい。現代どころか歴史上かなり長きに亘って〈到〉の旁は立刀（リットウ）である。〈矢〉と〈人〉で〈知〉。矢を折って神に誓うことをさすらしい。〈人〉が出てくると現代人には親しみがなくなるが、信仰の様子や思想が汲み取れて面白い。〈矢〉は〈族〉、〈屋〉などの字にも関連しており、多くは矢を射て刺さったところ（儀式にふさわしい場所は矢が刺さった地に決められていた）、或いは矢を折って誓うことをさすようだ。

各字について大変雑多で統一性のない偏った扱い方をしてしまったが、それだけ書いていてキリのないほど面白い分野だと思う。

思うに、我々はモノを用いる時にそのモノの素性を知らないことが多い。家庭用携帯ゲーム機器を所持していても、家庭用携帯ゲーム機器の内部構造を綿密に知っている者は少ないだろう。むしろ知らなくてもまるで支障なく使えるから、人々はそういうことに興味を持たなくなる。これは専門分野と一般教養の乖離が甚だしくなった結果だから仕方がないともいえるが、同じことは漢字でもあてはまるように感じる。我々が普段用いている漢字が本来どんな意図でつくられたものなのか、現在はそれがどれほど変化しているかを意識できる方が、ずっと言葉が鮮やかに見えてくる。パソコンの使い方だけ知っている人とパソコンの内部構造まで知っている人とでは当然パソコンに対する価値観が違うのである。かの白川静氏も著書に於いて勝手な改変の多い常用漢字の普及を嘆き「誤りを正当として生きなければならぬという時代を、私は恥ずべきことだと思う」と仰っている。是非今一度物事の「本性」を探る視点を持ちたいものだ。

主要参考頁

GlyphWiki　http://glyphwiki.org/wiki/

（2011 年 10 月現在で 220000 以上の字形が登録されている誰でも編集可能な Web 字典）

漢字データベースプロジェクト　http://kanji-database.sourceforge.net/

（説文解字など漢字に関するあらゆる文献がデータベースとしてまとめられている）

主要参考文献

『字書を作る』白川静／平凡社

（文字学の集大成と言うべき書）

『白川静さんに学ぶ　漢字は楽しい』小山鉄郎／共同通信社

（新聞の連載が単行本用に書き下ろされたもの。軽快な文体で図が豊富）

『漢字と日本人』高島俊男／文藝春秋

（国語・中国文学の専門家からみた日本語における漢字運用が述べられている。JIS や常用漢字に批判的）

『異体字の世界』小池和夫／河出文庫

（JIS 開発者による異体字紹介。ただし字体運用については一切述べず、字典と矛盾する記載も多い）

『新版　篆刻の実習』蓑毛政雄／教育図書

（中学 3 年の篆刻で用いた小冊子）

『字体のはなし　―超「漢字論」―』財前謙／明治書院

（書道家からみた字体運用。楷書重視の意見が多い）

『常用漢字　最新ハンドブック』前田富祺／明治書院

（常用漢字の意義とそれに準拠した漢字運用が記載されている）

『幻想世界 11 ヵ国語　ネーミング辞典』ネーミング研究会／笠倉出版社

（簡体字の字形と中国語の語彙に関して参考とした。なおアラビア文字の記載字形は大部分が誤り）